

# 後漢の鄧太后の学者集団による「校書」 ——『詩』生民と閼宮の「毛伝」にみる漢制——

飯 島 良 子

はじめに

後漢の時代には凡そ六度に亘り、洛陽の南宮の東観閣という蔵書庫でおこなわれた学者集団による「校書」という書物の校訂作業があった<sup>1)</sup>。この作業について、その名目・関連で古文経典、諸子、『漢書』、『太史公書』（『史記』）などの書物が、具体的にいつ頃、いかに改訂・増補されたか、経典の「伝」（注釈）がいかなる注釈意識で書かれたのか、今文経典の経文はいかに決定されたのか、というような様々の疑問の空白を、改めて根気よく推理、論証し、埋めてみる必要がある。そして、はじめて、後漢の学者集団によるその作業の本質と重要性を本格的に論ずることができると考えられる<sup>2)</sup>。本稿は、その初歩的な研究の微々たる一端として、安帝（106-125に在位）下の鄧太后の時代、および、桓帝（147-167に在位）の時代に東観閣で「校書」に携わった馬融（79-166）が書いた可能性が高いと推定される『詩』大雅・生民と魯頌・閼宮の「毛伝」の注釈意識に迫ってみたい。

通常、『詩』の「毛伝」は、『漢書』巻88・儒林伝の記載により、前漢の景帝の第三子、河間献王（劉徳）の博士の「毛公」が書いたとされる。『漢書』儒林伝には、たしかに、「毛公は、趙の人である。『詩』を治めて河間献王（劉徳、景帝の第三子）の博士となった」とある<sup>3)</sup>。しかし、第四節で後述するように、後漢の基本的史料である劉宋・范曄撰『後漢書』（以下、『後漢書』と称す）によれば、『詩』の「伝」は馬融（79-166）により書かれ、その後、靈帝（168-189に在位）の時代には、その馬融の『詩』「伝」それ自体が、『詩』の経文とともに学者集団による「校書」の対象となった。よって『後漢書』によれば、『詩』の「毛伝」のなかにも、馬融以後、靈帝下の学者ないし学者集団によって追加された部分があることになる。本稿では、「毛伝」の大部分は馬融が書いたと仮定して論を進めることとする。むろん、『詩』の「伝」の馬融による作成が、「校書」の名目の下におこなわれたとする明文の記載は『後漢書』にない。だが、馬融の『詩』「伝」が、鄧太后の「校書」と無関係であったとは考えがたい。馬融は鄧太后の時代に校書郎中として東観閣に10年間とどまり、その間、主として『詩』をはじめとする書物の注釈（アノテーション）を付したとみられるからである。この点について、第三節で後述する。

## 第一節 鄧太后の学者集団

鄧太后主導の下に「校書」に携わった学者集団の人数はその開始時には、五経博士など

50人余りにのぼったとされる。その前の章帝の時代の学者集団で名前が『後漢書』に記載される学者が8人であることから推して、「校書」の規模が拡大したらしいことが判る。その従事者として『後漢書』に名前が載るのは、劉珍、劉駒駘、平望侯毅（劉毅）、李尤、李勝、馬融、張衡、蔡倫、王逸、竇章の10人である。このうち、その主管者は劉珍、劉駒駘、馬融、張衡、蔡倫の5人で、開始当初からの主管者は劉珍、劉駒駘、馬融の3人であったとみられる<sup>4)</sup>。鄧太后の時代の「校書」を主管した学者集団については、張衡や蔡倫のように、それぞれ、天文学や工学の分野で秀でた才能を発揮した者をも携わったという点が一つの特徴として挙げられる。張衡は、一方で、古文經典の『周官』（『周礼』）の訓詁である『周官解詁』を著している。このような特徴は、この時代に「校書」の対象となった書物の分野が章帝の時代を超えて広がったことを示唆するとともに、この時代の經書解釈に精緻、精巧な天文学的、工学的な要素も加わった可能性があるかと推理することができる。

## 第二節 鄧太后の「校書」の動機

鄧太后の学者集団による「校書」について、『後漢書』孝安帝紀の永初四年（110）春二月乙亥（20日）の条に次の記載がある。

謁者の劉珍、および、「五經」の博士に詔勅を下して、東觀〔閣〕の「五經」、諸子、「伝」、「記」、多くの「芸」や「術」〔の書物〕を「校」して定め、誤脱を整齐し、文字を是正させた。<sup>5)</sup>（史料Aとする）

また、『後漢書』劉珍伝に史料Aと内容の重なる次の記載がある。

永初年間（107-113）に〔劉珍は〕謁者僕射となった。鄧太后は詔勅を下して〔劉珍に〕「校書」に協力させた。劉駒駘、馬融、および五經博士が、東觀閣〔所蔵〕の「五經」、諸子、「伝」、「記」、多くの「芸」、「術」、〔の書物〕を「校」して定め、誤脱を整齐し、文字を是正した。<sup>6)</sup>（史料Bとする）

史料A、Bから、鄧太后の時代の学者集団により、「五經」の經文が「校書」の名の下に、定められたらしいことが判る。

さて、鄧太后の「校書」の動機を窺いうる史料として、『後漢書』和熹皇后紀に次の記載がある。

〔鄧〕太后は宮廷に入って以来、曹大家（班昭、班固の妹）から經書〔の学問の教授〕を受けており、加えて、天文、算数〔の学問の教授〕を受けていた。昼間は王（和帝）の政（まつりごと）を手伝い、夜間に誦読した。そして、それぞれの〔書物の〕誤謬を

憂い、「典章」から乖離していることを危惧するようになった。そこで、広範囲から、多くの儒者、劉珍など、および、博士、議郎、四傳（太傅、大尉、司徒、司空）の五十人余りを選抜して東觀閣に参上させ、「伝」、「記」をつきあわせ、「校」させた。<sup>7)</sup>（資料 C とする。下線は筆者による。）

かく、この時期の鄧太后の「校書」の動機は、書物の誤謬と、書物の「〔典章〕からの乖離」にたいする危惧で、その危惧の下に、学者集団に「伝」と「記」をつきあわせ、校訂させたということになる。ここ（史料 C）にいう「典章」とは、『後漢書』順帝紀の「即位倉卒、典章多缺」の用例から推すと、当時の、すなわち、後漢の制度の規定や、条文、をいうと考えられる。ここ（史料 C）にいう「記」が具体的に何を指すのかは判然としない。おそらくは、『〔東觀〕漢記』を指すのであろうか。『東觀漢記』は、永初年間（107-113）には劉珍、劉駒駘などが撰集していたと伝えられる。ちなみに、『東觀漢記』と後漢の制度との関連については、『後漢書』張衡伝に次のような記載がある。

永初年間（107-113）、謁者僕射の劉珍、校書郎の劉駒駘などが東觀〔閣〕で著作し、『〔東觀〕漢記』を撰集し、それにより漢家の礼儀制度を制定しており、上言して〔張〕衡がその作業に参加して議論するように要請した。<sup>8)</sup>

この張衡伝の記載や先に掲げた永初四年（110）の安帝紀（史料 A）、劉珍伝（史料 B）、和熹皇后紀（史料 C）によれば、東觀閣では劉珍、劉駒駘などが『東觀漢記』を撰集し、その記載内容と当時の礼儀制度の規定、条文との間に矛盾や齟齬のないようにし、一方では、また後漢の礼儀制度をより整備して、さらに、それと「五經」の経文や「伝」などを整合させたとして理解するのが適切なのかと思われる。だが、あるいは、ここ（史料 C）にいう「記」は、『東觀漢記』だけを指すのではなく、より広義の意味で使っている可能性も残るように思われる。

### 第三節 校書郎中・馬融の東觀閣での 10 年

馬融（79-166）は、廬植や、「大儒」と尊称された鄭玄の師匠筋にあたり、その晩年には膨大な数の弟子たちをかかえて、その学問は当時の経学のいわば主流中の主流であったとみられる。馬融は永初四年（110）から鄧太后の意向に逆らって東觀閣を去るまで、約 10 年間、一貫して「校書」に携わった。『後漢書』馬融伝の次の記載からわかる。

〔永初〕四年（110）、〔馬融は〕校書郎中を拜命し、東觀〔閣〕に参上して宮廷の蔵書の「校訂」を主管した。この時代は鄧太后が宮廷を牛耳り、鸞の兄弟が政治を補佐していた。（中略）〔馬融は〕鄧氏を憚って東觀閣にとどまり、十年の間、転職する機会を捉え

ることができなかつた。〔融は〕兄の子が亡くなったという口実で、みずから〔官吏としての〕罪を暴露し訴えて官職から退いた。鄧太后はこのことを聞き怒り、融はみずからの悪い点を恥じる気持ちが薄弱であるといい〔つつも〕新たに官職につけたが、〔融が〕州か郡に仕えたいと願ったので、そのまま〔融の〕官吏となる資格を剥奪した。<sup>9)</sup>

その後、馬融は桓帝（147-167 に在位）の時代に南郡（現在の湖南省内）の太守（知事）となり、朔方（現在の綏遠の南境）に流罪となった後に議郎となり、再び東觀閣に戻り、著述したようだ。一体、校書郎中として永初四年（110）から 10 年間、馬融は東觀閣で蔵書に関わる何をしていたのか。『後漢書』馬融伝に次の記載がある。

〔馬融が〕「注」（アノテーション）を施した学問は、『孝経』、『論語』、『詩』、『易』、『三礼』（『周礼』、『儀礼』、『礼記』）、『尚書』、『列女伝』、『老子』、『淮南子』、『離騷』である。<sup>10)</sup>

この史料から、馬融の東觀閣での「校書」の内容の大半が、注釈（アノテーション）を付すことであつたらしいことが判る。一方で、『後漢書』曹政叔妻伝によれば、馬融は東觀閣で、班固の妹の曹大家（班昭）から『漢書』の読み方を伝授されている<sup>11)</sup>。永寧元年（120）頃に馬融は「校書」に従事することを、いったん罷めた。そして、それと相前後して、かの東觀閣では蔡倫を主管者として、経書やそれらの「伝」を、後漢の制度と整合する作業がおこなわれたようだ。『後漢書』蔡倫伝に次の記載がある。

〔元初〕四年（117）、〔安〕帝は、「経」、「伝」の文が多くは正確に決定されていなかったので、〔かえって〕「通儒」で謁者の劉珍、および、博士、「良史」を東觀閣に参上させて、〔「経」、「伝」を〕漢家の制度と讎校させ、〔蔡〕倫にその作業を監督させた。<sup>12)</sup>（史料 D とする。下線は筆者による。）

ここに、元初四年（117）当時、経書の「経」、「伝」の文が多くは正確に決定されていなかった」とするのは注目に値しよう。ここにいう劉珍などの作業により、元初四年以後、漢家の制度と経書の「経」、「伝」とが照合され、「経」、「伝」の多くが決定されていったように推察される。この蔡倫伝（史料 D）によるかぎり、馬融はこの時の経文を定める作業には関わっていなかったようだ。

#### 第四節 『詩』生民と閼宮の「毛伝」の特徴

本稿が『詩』生民と閼宮のいわゆる「毛伝」を取り上げる理由は、『詩』生民や閼宮にみる后稷の生誕神話が、王莽（前 45-23）の新莽政権（9-23）の最大の祀り、郊祀の祭儀神話

であり、新莽政権の史観によれば、中国人民の始祖は后稷であったと推察されるからである。だからこそ、新莽の国家学のテキストであるとみなされる古文經典の経文や『楚辞』に鏤められた后稷は、「天」と並び称される存在なのだと筆者は考える<sup>13)</sup>。

顧みるに、『後漢書』儒林伝によれば、新莽政権の崩壊後、建武元年(25)に劉秀(光武帝)が後漢政権を建立した際、古文經典を後漢に伝授したのは、いずれも新莽政権に起用された学者やその子息たちに限定される<sup>14)</sup>。古文經典の一つである『詩』を後漢政権に伝えたのは鄭衆、賈逵であるが、二人とも元々、新莽政権に起用された学者である。『後漢書』儒林伝(下)には、「中興の後、鄭衆、賈逵が『毛詩』を〔後漢政権に〕を伝えた。後に馬融が『毛詩』の「伝」をつくり、鄭玄(127-200)が『毛詩』の「箋」をつくった」とある。かくて、『後漢書』によれば、『詩』を伝えたのは前漢の毛公ではなく、鄭衆と賈逵であり、『詩』の「伝」をつくったのも「毛公」ではなく、馬融ということになる。

新莽政権崩壊から約8、90年経て、鄧太后の学者集団の一人として「校書」に携わった馬融は、果たしてどのような意識で、新莽政権の国家祭祀と密接な関わりをもったであろう『詩』の後稷生誕神話に、「伝」として注(アノテーション)を付したのか。また、その「伝」から薄々ながら管窺できるのは何か、探してみたい。

さて、后稷の名のみえる『詩』篇は、大雅・生民、大雅・雲漢、周頌・思文、魯頌・閟宮である。『詩』の「生民」、「雲漢」、「思文」、「閟宮」の経文では、后稷は上帝(天)と並び称される、天に配祭されるにかなう神奇な存在者とされている<sup>15)</sup>。「生民」(はじめの民)の冒頭には次のような経文があり、「毛伝」が付されている。

厥初生民、時維姜嫄、生民如何、克禋克祀、以弗無子、履帝武敏歆、攸介攸止、載震載夙、載生載育、時維后稷。

(「はじめの民は、かの姜嫄、はじめの民はどのようにであったか、姜嫄は禋をあげて祭り、〔上〕帝に子が授かるように祈った。帝〔に付き従って、そ〕の「武」(足跡)を踏み、揺れ動くのを感じ身籠り、生み、育てた、その〔子の〕名は后稷。)<sup>16)</sup>

毛伝：生民本后稷也。「姜」、姓也。后稷之母、配高辛氏帝焉。(後略)

(毛伝：人民の誕生は后稷が大本である。「姜」は姓である。后稷の母が、高辛氏の帝に配偶されたのであろうよ。)

この毛伝に特徴的なのは、后稷を帝嚳(高辛氏)の子とする点である。だが、馬融は文末に「焉」という助字を用い、断定を避けているようでもある。ところで、この「毛伝」の解釈は経文とも異なるし、鄭玄の解釈、いわゆる「鄭箋」とも異なる。「毛伝」、「鄭箋」の解釈の相違について、唐代の賈公彦は『周礼疏』(春官・大司楽の「疏」)で次のように解説する。

毛公の解釈は『史記』周本紀と同じである。后稷を帝嚳の子<sup>17)</sup>であるとみなしている。「帝の「武」を履みて、敏歆」は、毛伝では、帝嚳の車轍馬跡を履み、后稷を生んだという意味である。〔そこでも〕后稷は帝嚳の子としている。鄭君（鄭玄）の解釈は、『春秋〕命歴序』による。帝嚳から十世代を経て堯の世に至るとし、后稷を堯の官としている。そのようであれば、姜嫄は帝嚳の子孫の妃ということになる（後略）。<sup>18)</sup>

また、「生民」の詩に次のような経文があり、「毛伝」が付されている。

誕后稷之穡、有相之道、蒨蕝豐艸、種之黃茂、實方實苞、實種實褒、實發實秀、實堅實好、實穎實粟、卽有郃家室。

（「さて后稷の生業は、新しい技術もできて、茂った草を取り払い、良い穀物を植える、そろった苗はよく生えて、えりぬきの種はよくのび、花は開き、穂は高く出て、実は堅く形好く、穂先に鈴なりになる、やがて郃に家ができる。）

毛伝：（前略）「郃」、姜嫄之國也。堯見天因郃而生后稷。故國后稷於郃、命使事天、以顯神順天命。

（毛伝：「郃」は姜嫄の国である。堯は「天」が郃（陝西省武功の西南）に依拠して、后稷を生誕させたのをみた。そこで后稷を郃に居住させ、「天」に仕え、「神」を顕彰し、天命に従順であるように命じたのだ。）

この「毛伝」では、后稷は天と対等な存在ではなく、天に仕える存在であり、しかも、堯と后稷との間に君臣関係があるとすることが判る。

「閼宮」の詩の冒頭には次のような経文があり、「毛伝」が付されている。

閼宮有沍、實實枚枚、赫赫姜嫄、其德不回、上帝是依、無災無害、彌月不遲、是生后稷、降之百福。

（「閼宮は、清静として、堅固で美しい。赫赫たる姜嫄、その徳は邪でなく、上帝はこれに依拠した。〔姜嫄は〕無事に臨月を迎え、生まれたのが后稷、〔后稷は〕多くの福をもたらした。）

毛伝：「閼」、閉也。先妣姜嫄之廟在周、常閉而無事。孟仲子曰「是禱宮也。」「沍」、清浄也。「實實」、廣大也。「枚枚」、礫密也。（後略）

（毛伝：「閼」は、「閉」である。「先妣」の姜嫄の廟は、周の時代には、通常、閉まっていた、行事らしい祭りはなかった。孟仲子の説では「禱宮」のことである。「沍」は清浄である。「實實」は、廣大である。「枚枚」は、礫密である。

この「毛伝」についても、賈公彦の「疏」（『周礼』春官・大司楽の「疏」）は次のように、

経文とも、「鄭箋」とも異なるとする。

『詩』魯頌・閟宮の詩に「閟宮は、清静として、堅固で美しい」とあり、その「毛伝」に、「周の時代には、通常は閉まっていた、行事らしい祭りはなかった」とあり、この経文に「先妣」を祭るとあるのと意味が違っている。だから、鄭玄は毛伝に従わなかった。ここをもって、鄭注に「別に一つだけ廟を立てて祭った」という。<sup>19)</sup>

この毛伝で特徴的な点は、閟宮は周代において通常、行事らしい祭りはなかったとしたこと、また、この「閟宮」の詩に「孟仲子」の説としての引用ではあるが、「祿宮」という概念を持ち込んでいることである。

#### 第五節 「毛伝」の注釈意識（漢制との整合をめざして）

繰り返すが、『詩』「生民」や「思文」などの経文のみによれば、后稷は「生民」、まさしく、はじめの民であり、中国人民の生命力、生殖力の源泉で、「天」に配祭されるにかなう存在である。

第四節でみたように、『詩』「生民」の「毛伝」が后稷を高辛氏（帝嚳）の子としているのは、后稷を中国人民の始祖ではなく、周の始祖、とするためだと考えられる。后稷を周の始祖とするのは、『礼記』祭法などにみる史観で、後漢の章帝の時代に「校書」に携わった賈逵や班固などにより構築された<sup>20)</sup>。すなわち、劉漢を堯の末裔とする擬制的血縁を織りこんだ：

天は五行の順序をあらわす。堯と四臣（舜、禹、堯と舜に仕えたとされる后稷と契）はそれぞれの一行に依拠する。だが、堯こそがそのうちの「正」である。（後略）<sup>21)</sup>（班固の「典引」にたいする蔡邕の注）

とする典型的な五行相生説の循環史観にもとづくと考えられる。馬融が堯と后稷の間に君臣関係があるとするも同じ理由によろう。また、後漢政権による元和二年（85）二月に始まった堯の国家祭祀も馬融の念頭にあったかと思われる<sup>22)</sup>。『後漢書』安帝紀によれば、堯の国家祭祀は延光三年（124）二月にも使者を派遣して成陽県（山東省荷沢市の北東）で行われたという<sup>23)</sup>。

一方、『詩』「閟宮」の「毛伝」が注釈に「祿宮」という概念を持ち込んだのは、後漢の宮中の「高祿」の行事を意識したものであることが判る。『統漢書』礼儀志の「高祿」（子宝が宿るよう祈る神）の条文に次の記載がある。

仲春の月（陰暦の二月）、高祿祠を都城南に設置して、祀るに「特牲」をもちいる<sup>24)</sup>。

「高禘」については、『礼記』月令の「仲春之月」に、より詳細な次のような記述がある。

この月、玄鳥（燕）が渡ってくる。渡ってきた日に、「太牢」を用いて「高禘」（子が宿るよう祈る神）を祀る。天子みずから往き、后、妃は、九嬪を率いてつかさどるが、礼においては〔后、妃も〕天子がつかさどる対象となる。天子が弓袋を身に帯び、弓矢を高禘の前で〔后、妃、九嬪に〕授ける。<sup>25)</sup>

また、「毛伝」が「閼宮」について「周の時代には、通常は閉まっていて、行事らしい祭りはなかった」とするのは、あるいは、後漢の当時の高禘祀の実情を念頭に注を付したのかも知れない。

以上のようにみえてくると、馬融の「生民」と「閼宮」の「伝」の注釈意識は、鄧太后の「校書」の動機であった、書物の「〔典章〕からの乖離」の解消という目的に沿う、『詩』の経文と後漢の制度との整合にあり、その注釈意識の背後にあるのは、後漢の史観や、その史観にもとづく国家祭祀、礼儀制度などの威儀づけ、権威づけであったのではないかとみられる。

ところで、本稿で取り上げた『詩』の「生民」と「閼宮」の「毛伝」でいささか気になるのは、先にも触れたが、后稷を帝嚳（高辛氏）の子とする注釈の文の文末に「焉（であろうよ）」という助字が用いられていることである。馬融が断定を避けているように理解される。また、もう一つ気になるのは、馬融は「閼宮」に「禘宮」という概念を持ち込むが、「孟仲子」の説としての引用であることだ。あるいは、馬融は『詩』の経文を曲解することにたいして、多少の躊躇、あるいは、内心、忸怩たるものがあつたのかと疑われる。

## 結びにかえて

馬融が施したとみなされる『詩』「生民」、「閼宮」の「毛伝」の注釈は、単なる字義の解釈にとどまらず、後漢の史観や、漢制、といっても、実情は後漢の制度であるが、と、『詩』の経文の整合をめざしたものであることは、ほぼ間違いないと思われる。

むろん、繰り返すが、この論考で取り上げた『詩』「生民」と「閼宮」の「毛伝」がすべて馬融の手になったという確証はない。既に述べたように、靈帝下の学者ないし学者集団が注を付した部分が含まれているのかもしれない。だが、「生民」や「閼宮」に付された「毛伝」にみる堯と后稷の君臣関係という後漢の史観や、それにもとづく堯の国家祭祀、宮中行事である「高禘」の礼儀制度から推して、それらを意識してつくられた「毛伝」が、前漢の河間献王の博士によりにつくられたなどという『漢書』儒林伝の記載は、到底、信じるに足りない<sup>26)</sup>。

最後に、敢えて批判をおそれず付け加えさせていただくならば、現行本『史記』、『漢書』の文献批判をするためにも、後漢の東觀閣での「校書」の研究は不可欠であると筆者は推測

している<sup>27)</sup>。

## 註

(以下、注のなかの3桁ないし4桁のアラビア数字は、北京中華書局標点本の頁数を示す。なお、史料のうち容易に解読できるものは、標点本の頁数のみを示し、原文を省略した場合がある。)

- 1) 後漢の「校書」について、拙稿「後漢の章帝の学者集団による「校書」— 史観の構築に関して—」(『後漢経学研究会論集』、2011年6月、後漢経学研究会、東京)がある。
- 2) 第二節の史料A、Bをご参照。
- 3) 原文は卷八十八・儒林傳第五十八の「毛公、趙人也。治詩、爲河間獻王博士(後略)」3614頁。また、『漢書』卷三十・藝文志に『詩』に関して、「又有毛公之學、自謂子夏所傳、而河間獻王好之、未得立。」1708頁とある。
- 4) 注末の〔付記〕をご参照。
- 5) 卷五・孝安帝紀の原文は「詔謁者劉珍及五經博士、校定東觀五經、諸子、傳記、百家藝術、整齊脱誤、是正文字。」215頁。
- 6) 卷八十上・劉珍伝の原文は「永初中、爲謁者僕射。鄧太后詔使與校書。劉駒駘、馬融及五經博士、校定東觀五經、諸子、傳記、百家藝術、整齊脱誤、是正文字。」(2617頁)あるいは、「校書」の下に「郎」を補って読むべきか。
- 7) 卷十上・和熹皇后紀の原文は「太后自入宮掖、從曹大家受經書、兼天文、算數。晝省王政、夜則誦讀、而患其誤謬、懼乖典章、乃博選諸儒劉珍等及博士、議郎、四府掾史五十餘人、詣東觀讎校傳記。」424頁。
- 8) 卷五十九・張衡伝の原文は「永初中、謁者僕射劉珍、校書郎劉駒駘等著作東觀、撰集漢記、因定漢家禮儀、上言請衡參其事、會並卒、而衡常嘆息、欲終成之。及爲侍中、上疏請得專事東觀、取檢遺文、畢力補綴。」1940頁。
- 9) 卷六十上・馬融伝の原文は「四年、拜爲校書郎中、詣東觀典校秘書。是時鄧太后臨朝、鸞兄弟輔政。(中略)(元初二年、上廣成頌以諷諫。(中略)頌奏)、忤鄧氏、滯於東觀、十年不得調。因子喪自劾歸。太后聞之怒、謂融羞薄詔除、欲仕州郡、遂令禁錮之。」1954頁・1970頁。
- 10) 卷六十上・馬融伝の原文は、1972頁。
- 11) 卷八十四・列女伝の曹政叔妻(班昭)伝の原文は2785頁。
- 12) 卷七十八・蔡倫伝の原文は「四年、帝以經傳之文多不正定、乃選通儒謁者劉珍及博士良史詣東觀、各讎校(漢)家法、令倫監典其事。」2513頁。この「良史」を中華書局標点本は人名に解するが、本稿では「体制秩序に従順な「史官」という意味に理解した。この蔡倫伝の記載のなかで、元初四年(117)当時、儒家經典やその「伝」の文の多くは未だ確定されていなかったという点は、現行本の儒家經典の成立という観点から注視される。
- 13) 新莽政權の史観について、拙稿「莽新政權の国家統合論— 后稷神話と王莽のまつり—」(国際基督教大学学報Ⅲ-A「アジア文化研究」21、1995年3月、国際基督教大学)がある。文字通りの拙論で、『毛詩』の経文は経文として、「毛伝」は「毛伝」として、「鄭箋」は「鄭箋」として読むべきところ、経文と「毛伝」を混同して読んでいる箇所があるなど、訂正すべき点がある。だが、新莽政權の史観によれば、后稷が人民の先祖であったとみられるという主張そのものは現在も変わらない。
- 14) 古文經典の後漢への伝授について、

- ・『古文尚書』に関して、卷七十九上・儒林伝（上）に「扶風杜林傳古文尚書、同郡賈逵爲之作訓、馬融作伝、鄭玄注解、由是古文尚書遂顯世。」とある。
  - ・『周官』に関して、卷七十九下・儒林伝（下）に「中興、鄭衆傳周官經、後馬融作周官傳、授鄭玄、玄作周官注。」(2577 頁) とある。
  - ・『春秋左氏伝』に関して、卷七十九下・儒林伝（下）に「建武中、鄭興、陳元傳春秋左氏學。」(2587 頁) とある。
  - ・『易』に関して、卷七十九上・儒林伝（上）に「建武中、范升傳孟氏易以授楊政。而陳元鄭衆皆傳費氏易、其後馬融亦爲其傳、融授鄭玄、玄作易注、荀爽又作易傳、自是費氏興、而京氏遂衰。」とある (2554 頁)。
- 15) 大雅・「雲漢」には次のようにある。
- 「后稷不克、上帝不臨、(耗斁下士、寧丁我躬。)(「后稷は善しとせず、上帝は受けいれてくれない。)」毛伝：「「丁」、當也。」
- 周頌・「思文」には次のようにある。
- 「思文后稷、克配彼天、立我蒸民、莫匪爾極、貽我來牟、帝命率育」(「ああ、文なる后稷は、かの天に配祭するにかなう。われら民草ここに生ありて、わが祖、后稷の極(おきて)にあわざるなし。(後略)」
- 毛伝：「「極」、中也」、「牟」、麥、「率」、用也。」
- 「思文」はより古いテキストでは「渠」という篇名であったようだ。『周礼』春官・鐘師の鄭玄注所引杜子春がさらに引く呂叔玉の説に次のようにある。
- 渠、大也。言以后稷配天、王道之大也。(「渠」は、「大」のこと。言う心は、后稷を天に配祭するのは、王の治理の大意ということなのだ。)
- 16) 「生民」の経文の訳文は、藤堂明保監修、加納喜光訳『詩経下』(学習研究社、古典 19、1983 年)を参照した。
- 17) テキストは「妃」につくるが、文脈から「子」と読んでおく。
- 18) 賈公彦の「疏」の原文は「毛君義與史記同、以爲姜嫄帝嚳妃、履帝武敏歆、謂履帝嚳車軌馬跡、生后稷、后稷爲帝嚳親子。鄭君義依命歷序、帝嚳傳十世乃至堯、后稷爲堯官、則姜嫄爲帝嚳後世妃。」南宋初兩浙東路茶塩司刊、宋・元・明通修本による。
- 19) 賈公彦の「疏」の原文は「案、閼宮詩云、閼宮有血實實枚枚、毛云、在周常閉而無事、與此祭先妣義違、故後鄭不從、是以鄭云、特立廟而祭之。」テキストは註 18 と同じ。
- 20) 『礼記』祭法には「周の人は帝嚳を「禘」し、后稷を「郊」し、文王を「祖」し、武王を「宗」す」とある。
- 21) 「典引」蔡邕注の原文は「天有五行之序、堯與四臣各據其一行、而堯爲之正、四臣已徧、故歸功元首之子孫、而授漢劉也。」「典引」については、註 1 の前掲論文で述べたので、ここに繰り返さない。
- 22) 章帝紀の原文は 149 頁。
- 23) 安帝紀の原文は 238 頁。
- 24) 『統漢書』礼儀志の原文は「高禴 仲春乃月、立高禴祀于城南、祀以特性」。劉昭注に「毛萇傳曰」として、「毛伝」を引用する。
- 25) 『礼記』月令の原文は「是月也、玄鳥至。至之日、以太牢于祀高禴、天子親往、后妃帥九嬪御、乃禮天子御、帶以弓鞬、授以弓矢、于高禴乃前。」
- 26) 『詩』の毛伝を前漢の毛公が書いたとする『漢書』儒林伝の記載について、はたして、どの学者

ないし学者集団が書いたのか。『後漢書』張衡伝に「〔張衡は〕また、司馬遷と班固の叙述した所と他の典籍で〔その記載内容が〕合致しない十数件を箇条書きにして上奏した」とある。鄧太后の時代に東観閣で「校書」の名のもとに張衡が『漢書』儒林伝のこの記載を書いたのだろうか。疑問は解決していない。

- 27) 後漢政権の「校書」に携わった学者集団が、政治的権威の保持や政権維持という大義 (cause) のためには、『太史公書』（『史記』）や『漢書』における新莽政権やそれ以前の王朝の史観や礼儀制度などに関する歴史的事実を「校書」の名目の下に改訂することをも辞さなかった可能性が十分あると考えられるからである。註1の前掲論文をご参照いただければ幸いです。

## 付記

鄧太后の「校書」に携わった学者は、以下に掲げる范曄撰『後漢書』の記載にもとづき特定した。

- ・ 卷六十九（上）（儒林列傳）孔僖傳（2562 頁）孔僖
- ・ 卷七十（上）（文苑列傳）李尤傳（2616 頁）李尤
- ・ 同じく卷七十（上）（文苑列傳）李尤傳（2616 頁）劉珍
- ・ 卷五孝安帝紀（215 頁）劉珍
- ・ 卷十（上）皇后紀（424 頁）劉珍
- ・ 卷七十（上）（文苑列傳）劉珍傳（2617 頁）劉珍、劉駒駘、馬融
- ・ 卷六十（上）馬融傳（1954 頁）馬融
- ・ 卷二十三竇章傳（821-822 頁）竇章
- ・ 卷六十（上）馬融傳（1972 頁）馬融
- ・ 卷五十九張衡傳（1940 頁）劉珍、劉駒駘、張衡
- ・ 卷七十八（宦者列傳）蔡倫傳（2513 頁）劉珍、蔡倫